

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## 戦争と人間

1970年、71年、73年・日本映画・565分  
配給/日活

2003 (平成15) 年1月26日鑑賞  
〈シネ・ヌーヴォ・中国映画の全貌2004〉

Data

監督：山本薩夫

出演：滝沢修／芦田伸介／浅丘ルリ子／栗原小巻／北大路欣也／吉永小百合／加藤剛／石原裕次郎／三国連太郎／佐久間良子／山本圭／岸田今日子／中村勤九郎／高橋英樹

## 👁️👁️ みどころ

五味川純平の原作を山本薩夫監督が、1970年、71年、73年に日活で映画化した3部作。日中戦争、とりわけ満州を舞台として、新興財閥の五代一族を中心に、壮大なドラマが展開される。見応えあり。五代財閥のボスは渋くてカッコいいし、北大路欣也、高橋英樹もカッコいい。また浅丘ルリ子や吉永小百合も本当にキレイ。こんなミーハー的魅力だけではなく、もちろん社会性も十分だ。あの時代はやはり本当にすごかったと痛感する。10時間座りっぱなしも全然苦にならず、感激のみ。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### 〈全3部、約10時間を一挙に〉

2003 (平成15) 年1月26日は私の54歳の誕生日。その日 (日曜日) 私は、大阪市西区のシネ・ヌーヴォで開催されている、「中国映画の全貌2002-3」で上映された「戦争と人間」3部作を一挙に鑑賞した。「第1部・運命の序曲」は194分、「第2部・愛と悲しみの山河」は182分、「第3部・完結篇」は189分、合計565分 (9時間25分) の大作だから、休憩時間を入れると10時間以上もずっと映画館の中になっていたことになる。もちろん弁当やお茶持ち込みでの鑑賞だ。

この作品は、五味川純平の原作「戦争と人間」を、山本薩夫監督が1970年、71年、73年と立て続けに映画化したもの。原作は日中戦争をメインの舞台として描きながら、太平洋戦争の動きも入れ、日本という国の長期にわたる戦争の時代、そしてその中で翻弄される人間の姿を描いたものだが、あまりにも巨大すぎる物語のため、映画化されたのは太平洋戦争に突入する前のノンハン事件までとなっている。しかしそれでも、まさに「戦争と人間」というタイトルどおりの壮大なドラマに仕上がっている。

## <物語の基本>

物語の基本は、新興財閥の五代一族を中心として、昭和3（1928）年以降の満州を中心的な舞台として展開される、「戦争と人間」の物語だ。

日露戦争の勝利の後、中国での利権獲得競争に走る西欧列強の中には日本も参加していた。そして昭和3年の満州においては、関東軍が幅をきかせていた。

北京に拠点をついた軍閥の張作霖が、蒋介石率いる国民党の南京政府から討伐される機会に乗じて、関東軍は天皇の奉勅命令を得て武力行使に走り、一挙に満州での利権を確立させようと狙っていた。当時の関東軍の拠点は旅順、奉天（今の瀋陽）、長春等であり、これらを中心とする諜報活動には目まぐるしいものがあつた。こんな関東軍の参謀たちと気脈を通じ、何かと東京本社に情報を提供していたのは、満州五代の五代喬介（芦田伸介）。五代財閥の当主五代由介（滝沢修）の実弟だ。喬介は、関東軍の力を利用して満州の地における五代財閥の力の拡大を狙っていた。

## <多種多様な登場人物たち>

映画は東京の五代邸でのパーティから始まる。長男英介（高橋悦史）、次男俊介（中村勘九郎）、長女由紀子（浅丘ルリ子）、次女順子（佐藤萬理）らが揃っている。軍人たちには関東軍の河本大作参謀をはじめ、由紀子を想う柘植大尉（高橋英樹）たちが揃っている。五代産業の幹部社員矢次（二谷英明）らも顔を揃えている。そしてそこには一人の異色の少年、標（しめぎ）耕平もいた。耕平はたった一人の兄がアカの活動のために逮捕されたため矢次が引き取った少年だ。そして耕平は同世代の五代の次男俊介やその妹順子の友達となった。

他方、満州五代の喬介は、一方では人間愛に燃えた部下の高島（高橋幸治）を使い、他方ではアヘン、人殺し、強盗、強姦何でもござれの嶋田（三国連太郎）等をうまく使っていた。また情報屋のナゾの女鴻珊子（岸田今日子）とは頻繁に接触し、さらに中国共産党員だと知りつつ白永祥（山本学）もその配下（従業員）に抱え込んでいた。

また中国の地に根を張って医療活動に従事する日本人医師不破（田村高廣）や医科大学の服部医師（加藤剛）は、中国商人趙大福の息子で医師の趙延年や娘の端芳（栗原小巻）らと共に、日中の行く末を案じていた。

「戦争と人間」3部作は、これらの登場人物を軸として、戦争の時代が流れていく中で、ダイナミックに人間たちのドラマが展開していく物語だ。

## <第1部・運命の序曲>

第1部は、東北地方の軍閥である張作霖を北京から追放するため、国民党の蒋介石が起こした北伐からその歴史の動きが始まる。関東軍は、この動きに乗じて、張作霖の乗った

列車を爆破させて、コト（すなわち軍事行動）を起こそうとしたが、軍隊の出動に不可欠な天皇の裁可、すなわち奉勅命令は出されなかった。これにイラつく関東軍参謀や満州五代の喬介たち。

しかし河本参謀の後任として着任した板垣征四郎と石原莞爾の両参謀の策略により、遂に1931（昭和6）年9月18日、奉天郊外の柳条溝付近において、中国軍によって列車が爆破されたことを口実として、関東軍は一挙に軍事行動に出た。これは完全な現地軍による独断専行行為であり、以降関東軍の悪しきモデルとなったやり方だ。これが「柳条溝事件」であり、満州事変の始まりである。1932年には戦火は上海にも広がり、上海事変が勃発した。そして柘植大尉の姿も上海にあった。第1部は、さらなる戦火の広がりを予告したところで終わる。

## <第2部・愛と悲しみの山河>

第2部は、1932年の上海事変から1937年本格的な日中戦争が始まるまでが舞台だ。第2部では、大学に通う五代家の次男俊介（北大路欣也）とその友人の標耕平（山本圭）が登場する。また耕平の恋人となる次女順子（吉永小百合）や、俊介が想う人妻久慈（佐久間良子）が登場する。さらに長女由紀子も柘植大尉との愛に自分をかけることを決意し、金沢の連隊を訪ねる。このように第2部では、それぞれの恋愛模様が盛んだ。

他方では耕平を中心とした、アカ（日本共産党）弾圧の様子も生々しく描かれる。善良なプロレタリア画家の灰山（江原真二郎）やちょっと癖があり嫌味なプロレタリア作家陣内（南原宏治）も登場する。彼らも逮捕間近であり逮捕されれば過酷な取調べ（拷問）が待っている。今の若い人たちがこれを観たらショックを受けるかもしれないが、治安維持法と国家総動員法の時代の日本は、本当にこんなすごい時代だったことを認識する必要がある。

また第2部では、朝鮮人除在林（地井武男）とその恋人ユンボキも登場する。除在林は、朝鮮人の抗日遊撃隊の隊長でとにかくケンカっ早い。これは除在林の家族がみんな殺されたため、その復讐心に燃えているためだ。彼は日本人からも中国人からも満州人からも蔑まれる、当時最も悲惨だった朝鮮人の姿を代表する人物として描かれている。

## <第3部・完結編>

戦争の時代はさらに進んでいく。南京を落とし、徐州を攻め、さらに武漢を落しても日中戦争はケリがつかなかった。蒋介石は重慶に本拠地を移し、頑強に抵抗したため、日中戦争は次第に泥沼化していった。そして蒋介石の命令で中国共産党討伐のため西安の地にあった張作霖の息子である張学良が、共産党との内戦の中止と国民党、共産党が合同して共通の敵である日本帝国主義に立ち向かうべきであると主張して仕組んだ西安事件が1936年12月に起こった。これは、張学良が西安を訪れた蒋介石を軟禁して、共産党との

和解と国共合作、抗日統一戦線の結成を迫った歴史上の大事件だ。そしてこの張学良の努力によって第2次国共合作が成立し、抗日統一戦線が結成され、次第に中国軍の反攻は強くなっていったのだ。

一方耕平は、アカの活動のために逮捕され、拷問の末、軍隊へ。そして満州での戦闘で「戦死」した。順子は俊介の応援を得て、親の勘当を覚悟で耕平と正式に結婚していた。そして今は五代家を離れて、貧しい人たちを助けるべくセツルメント活動をしていた。耕平の戦死を告げられながらも健気に活動を続けていた順子のところへ、突然憲兵隊が耕平のことで調べにきた。なぜ今頃・・・。「そうだ。耕平さんは生きてるんだ・・・。」と気づく順子。山本薩夫監督好みの吉永小百合による何ともカッコいいシーンが展開される。

他方俊介も父親の庇護の下で、徴兵猶予を受けていたが、自由主義的思想と行動のため、遂に軍隊へ入れられた。そしてノモンハンの国境警備の部隊に配属され、前線指揮官の柘植少佐と出会うことになった。当時の関東軍司令官はあの東条英機。彼は、ドロ沼化する日中戦争の打開のため、あえて対支対ソの二正面作戦を主張した。そして辻政信参謀らは、対ソ戦の「小手調べ」としてノモンハン国境においてソ連軍とコトを構えた。ドイツの東方（ソ連方面）への進出が活発な今が、ソ連を「叩く」絶好のチャンスというわけだ。しかし結果は・・・。

まさにこの原作者である五味川純平が「人間の条件」の中で自らの体験として描いた圧倒的なソ連の国力を見せつけられたのだ。このノモンハン事件については司馬遼太郎もいろいろな本で詳しく述べているように、この経験によって敵我の如何ともしがたい国力の差を認識すべきだったのである。しかし数字を精神力で補うことに何の疑問も感じなくなっていた当時の軍部やその参謀たちは、もはやノモンハン事件を客観的に分析する能力を失っていた。その結果、日本は以降も泥沼の戦争に突っこんでいくことになったのだ。

#### <第4部、第5部への期待>

1970年代、そしてこの映画がつくられた当時、日本は高度経済成長時代にあつたものの、映画界は斜陽産業だった。従って、この「戦争と人間」のような大作を次々と作る体力はもはやなくなり、ロマンポルノ等で食いつなぐ時代となっていた。このため本来は全4部作を予定していた「戦争と人間」の映画化は、3部をもって完結編とすることになってしまった。従って、多くの登場人物の処理などにおいて多少尻切れトンボ的な面があることはやむを得ず、ノモンハン事件の終了をもって、無理矢理に映画をすべて完結させている。しかし本当は、このような本格的な映画をもっともっともっと製作して欲しいものだ。日本映画界の力がかかり復活してきた今、再度この原作に基づく映画化の企画を期待したい。

2003（平成15）年1月27日記